

◆函館市K小学校

平成二十三年三月十一日に起きた東北地方太平洋沖地震は、東日本大震災を引き起こし、函館にも甚大な被害をもたらした。

洋一が校長として勤務するK小学校でも、この地震をまともに受け、直ちに避難した。

洋一「すぐに非常ベルを鳴らしてください。」

教頭「わかりました。」

洋一「避難場所は、児童玄関横の校庭です。」

教頭「はい。」

教頭が、緊急の校内放送をかける。

教頭「地震です。地震です。教室にいる人は机の下に身を隠してください。廊下やトイレにいる人は、壁際に寄って頭を手で覆いしやがんでください。繰り返します。地震です。地震です。……。」

洋一「ずいぶんと長い地震ですね。」

教頭「はい、かなり大きな地震です。」

やがて、地震がおさまる。

洋一「教頭先生、次の放送をお願いします。私は、校内を見回ってきます。」

教頭「地震がおさまりました。校内にいる皆さんは、急

いで児童玄関横の校庭に避難してください。繰り返します。……」

◆校庭

児童が避難している。

直ちに、児童数を数え全員の無事を確認。

その後、先生方と協議をし、集団で下校することを決定。

先生方を前に校長である洋一が指示を出す。

洋一「これから直ちに、集団下校をしますが、先生方は自宅に保護者のいない場合は、確認がとれるまで子供を家に返さないでください。保護者不在の場合、子供をまた学校まで連れて来てください。子供の安全を第一に考えます。保護者がいない家に子供を絶対に返してはいけません。先生方、よろしくをお願いします。」

洋一からの指示を受け、教職員全員で集団下校に取り掛かる。

洋一は、学校に残る。

その時、携帯電話に聖子から連絡が入る。

洋一「もしもし」

聖子「地震、すごかったわね。学校は大丈夫なの？あなたは？」

洋一「子供たちは、今、先生方をお願いして集団で下校している。俺は大丈夫だけれど、そっちの方が、危険なんじゃないか？」

聖子「今のところ、海の様子は変わってないけれど……」

洋一「かなり大きな地震だったから、津波には、気を付けた方がいいぞ。とにかく正確な情報をもとに、素早く行動することが一番、大切だからな。」

聖子「わかったわ。」

洋一「また後で、こっちから連絡する。」

聖子「とにかく、気を付けてね。」

洋一「ああ」

間もなく、先生方が集団下校から帰ってくる。
各学級担任に聴き、子供たち全員が帰宅したことを確認する。
テレビのニュースでは、尋常ではない震災後の様子が映し出されている。
特に、津波の被害が甚大である。

教頭「校長先生のご自宅は、海のすぐ近くでしたよね。
大丈夫なんですか。」

洋一「大丈夫だとは思いますが・・・。」

教頭「子供たちも全員帰宅しましたし、もう五時も過ぎています。どうぞ、お帰りください。後は、私がやります。」

その時、携帯電話に聖子から連絡が入る。

聖子「海の様子がおかしいの。あなた、すぐに帰ってこれる？」

洋一「海の様子がおかしいって、どんなふうなんだ？」

聖子「水が、引いてる。見たこともないくらい沖まで・
・・・。」

洋一「わかった、すぐに帰る！」

教頭に事情を説明し、洋一は急いで帰宅する。
洋一の脳裏に、チリ沖地震の時の母の言葉が甦る。
「見たこともないくらい沖まで、水が引いた。」
館岡家の自宅と海の間には、遮るものは何もない。
館岡家は、正に海に直面している。

(「函館ワンニャン物語 ⑮」へ続く・・・)